

# 臟腑経絡先後病脈証第 1

第 1 条 問曰、上工治未病、何也<sup>1</sup>。

師曰、夫治未病者、見肝之病、知肝伝脾、当先実脾。四季脾王不受邪、即勿補之。中工不曉相伝、見肝之病、不解実脾、惟治肝也。夫肝之病、補用酸、助用焦苦、益用甘味之薬調之。酸入肝、焦苦入心、甘入脾。脾能傷腎、腎氣微弱、則水不行。水不行、則心火氣盛。心火氣盛、則傷肺。肺被傷、則金氣不行。金氣不行、則肝氣盛、故実脾、則肝自癒。此治肝補脾之要妙也。肝虚則用此法、実則不在用之。経曰、虚虚実実、補不足損有余、是其義也、余臟準此。

(超意識)

<問>

「良医は未<sup>み</sup>病<sup>びょう</sup>を治す」といいますが、どういうことでしょうか？

<答>

たとえば、良医は肝の病は脾に伝わることを知っているの、肝の病をみたととき先回りして脾を手当てするということだ（脾が充実していれば邪を受けないので、その必要はない）。

凡医はこのことを知らないから、肝の病をみたら肝を直接治すだけで終わる（そもそも肝の病は、肝に入る酸味薬を用いて肝を直接補う以外に、心に入る苦い薬で心を助け、脾に入る甘い薬で脾を補益し、それぞれを調べて治すものだ）。

<sup>1</sup> まずお断りしておくが、金匱要略では 1. とか 2. という番号は付いていない。筆者が便宜上付けただけである。句読点も元々ないので、筆者が適当につけている。

脾気が充実すると、相克関係<sup>2</sup>にある腎を抑える（土克水）。腎気が抑えられれば水が巡らなくなる（腎主水）。水が巡らないと、相克関係にある心の火気（水克火）を抑制できず、心火が盛んになる。盛んな心火は、相克関係にある肺を抑える（火克金）。すると金の気が巡らなくなり、相克関係にある肝への抑制（金克木）がとれて、肝気は旺盛になる。だから、脾を充実させると肝も充実し、肝の病は自然に治るわけだ。

以上が「未病を治す」の要点だ。肝気が虚していればこの方法を用いるべきで、充実していれば不要だ。虚実をしっかりと見定め、不足を補い過剰を除去せよというのは、こういうことだ。他の臓の病も同様に治せばよい。

さて、冒頭の「問曰」、「師曰」って、誰と誰が会話しているのか？ 『黄帝内経靈樞』に「上工治未病」なるくだりがあるから、ここも黄帝と岐伯か？ まあ深く考えずに、「Q&A形式で書かれた本」と考えて先に進もう。

ここでは、有名な「未病」の概念が述べられている。肝の病を例に、五行・五臓の相生・相克関係を使って、未病を治す要点を説明している。ここでぜひ五行についておさらいしておこう。

第2条 夫人稟五常、因風氣而生長。風氣雖能生万物、亦能害万物。如水能浮舟、亦能覆舟。若五臟元真通暢、人即安和。客氣邪風、中人多死。千般疾難、不越三条。一者、經絡受邪、入臟腑為內所因也。二者、四肢九竅血脈相伝、壅塞不通、為外皮膚所中也。三者、房室、金刃、虫獸所傷。以此詳之、病由都尽。若人能養慎、不令邪風干忤經絡、適中經絡、未流伝腑臟、即医治之。四肢纔覺重滯、即導引吐納、鍼、灸、膏摩、勿令九竅閉塞。更能無犯王法、禽獸災傷、房室勿令竭乏、服食節其冷、熱、苦、酸、辛、甘、不遺形体有衰、病則無由入其腠理。腠者、是三焦通會元真之處、為血氣所注。

<sup>2</sup>五行説では、肝・腎・脾・肺・腎の五臓は木・火・土・金・水の五行にそれぞれ属する。それぞれの臓が相互に制御しあっているのを相生・相克関係という。

理者、是皮膚臟腑之文理也。

(超意訳)

人は生まれつき、自然の一部である五臓を授かっているのだから、自然の影響を受けて成長する。自然はすべてのものを生かしても殺しもできる。例えば水は、舟を浮かすことも転覆させることもできる。五臓に備わる正気が順調に循環していると人は健康だが、邪気を受けて当たってしまうと人は死ぬことが多い。

病気の原因はさまざまだが、3つに大別できる。

1つ目は、邪が経絡<sup>けいろく</sup>から臓腑に入りこんで生じたもの。

2つ目は、外の皮膚が冒され手足、九竅<sup>きゅうきやう</sup><sup>3</sup>、血脈に伝わり、これらが塞がって機能しなくなったもの。

3つ目は、セックスのし過ぎ、刃物の傷、虫や動物による傷など。

結局この3つだ。

人は養生に努めて体に悪いことを慎んでいけば、邪が経絡を襲うことがないし、もしそうなっても、邪が腑・臓に伝わる前に医者が治せる。

四肢にわずかでも滞りを感じたら、すぐに導引術(按摩)、吐納法(呼吸法)、鍼、灸、膏摩法(皮膚に軟膏を塗ってから擦る)などを行って、決して九竅を閉塞させてはいけない。

さらに、生活習慣を守り、鳥獣・災害による負傷を避け、セックスをし過ぎて精気を消耗させないようにし、衣服と食生活を節制して、冷たいもの、熱いもの、苦いもの、酸っぱいもの、辛いもの、甘いものを摂り過ぎないようにし、体格が衰えないように維持できれば、病は決して腠理<sup>そうり</sup>から入り込めない(腠:三焦が正気に出逢うところで、気血がここに注ぐ。理:掌・足底・指の皮膚臓腑の紋理)。

ここでは病気の種類は3つに集約できることと、養生法について述べている。

<sup>3</sup>眼・鼻・耳・口・外陰・肛門のこと。9つの穴のこと。前3者には「穴」が2つずつある。

前者はとてもだめだが、後者は現代にも通用する。ここまでで、未病を防ぐという東洋医学的なエッセンスが濃厚に提示されている。

第3条 問曰、病人有気色見於面部。願聞其説。

師曰、鼻頭色青、腹中痛。苦冷者死。鼻頭色微黒者、有水氣。色黄者、胸上有寒。色白者、亡血也。設微赤非時者死。其目正円者瘥、不治。又色青為痛。色黒為勞。色赤為風。色黄者便難。色鮮明者有留飲。

(超意識)

<問>

病勢が顔色に表れるとありますが、どういうことでしょうか。

<答>

鼻頭の色(註:脾の状態を表す)が青い場合(註:五行で肝の色)は、肝が脾を抑えているので腹が痛む。この場合、苦しがつて体が冷たいものは死ぬ。

鼻がわずかに黒い場合(註:五行で腎の色)は、腎が脾を抑え水気が溜まっているのだ。

黄色い場合(註:五行で脾の色)は、脾の機能低下があり胸に冷えがある。白い場合は血を失っているのだ。

時季に合わずわずかに赤い場合は、内部に寒が居て陽を追い出しているのだ、死ぬ。

眼が円く開いたままの場合は、筋肉の引き攣れる瘥病で、治らない。

また、顔全体の色が青いのは痛みの存在を、黒いのは過労を、赤いのは風にやられたことを指し、黄色いものは便秘しているのだ。顔がテカテカとしている場合は、水が皮膚の下に溜まって停滞したまま動かないのだ。

顔色のことをいっているので、望診の話である。現代医学ではあまりあてにならないので、参考にとどめる程度でじゅうぶんだらう。

第 4 条 師曰、病人語聲寂然、喜驚呼者、骨節間病。語聲暗暗然不徹者、心膈間病。語聲啾啾然細而長者、頭中病。

(超意識)

病人の言葉数が少なく、ときどき急に驚き叫ぶ場合は、関節の病だ（疼痛が走るのだろう）。

声が低く不明瞭な場合は、心～横隔膜の病だ（心肺機能低下により大きい声が出せないのだろう）。

声がすすり泣くようでも細く長い場合は、頭中の病だ（大きい声を出すと頭に響いて痛むのだろう）。

患者の発する声で病気の診断を行う、<sup>ぶんしん</sup>聞診例をあげている。なるほどそうかもしれないが、これだけで診断は無理、という程度だ。

第 5 条 師曰、息搖肩者、心中堅。息引胸中上気者、咳。息張口短気者、肺痿唾沫。

(超意識)

息をするとき、肩を揺らすように胸式呼吸をする場合は、胸の中が堅くこわばっているのである。息を吸い込むべきときに逆に吐き出すのは、咳だ。息を吐くときに口をすぼめ、息切れがするのは、肺痿だ。痰を咯出する。

本条と次条は現代でもよくみられる呼吸異常である。現在の気管支喘息や COPD の症状に当たるだろう。これらを望診で見分ける例を次条であげている。

第 6 条 師曰、吸而微数、其病在中焦、実也、当下之即癒。虚者不治。在上焦者、其吸促。在下焦者、其吸遠。此皆難治。呼吸動搖振振者、不治。